

---

# Fate ~ 再開 ~

airia

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

F a t e ー再開ー

### 【Nコード】

N 0 2 2 3 0

### 【作者名】

a i r r i a

### 【あらすじ】

もしもセイバーとアーチャー（衛宮士郎）が再び冬木市で聖杯戦争をする場合、この二人がお互いを好きでいる場合だったらなど、なるべく原作のキャラを使い、この二人の願いがかなえていく様子を書いていこうと思います。なるべくこの二人を中心として物語を進めようと思います

## 新たな始まり（前書き）

はじめての投稿です。へたくそですがよろしくお願いします。  
つじつまがあわないときなどあるかもしれませんが、そこは見守ってください。

F a t e の I F 小説です。

## 新たな始まり

夢を見ていた・・・。

愛しい青年と共に戦う夢・・・。

「シロウあなたともう一度、会いたい・・・っ！」

ふいに涙が零れ落ちた。とてつもなく息苦しく感じた。

（あの人の顔が見たい！）

セイバーは涙を流しながら目を瞑った、カレと会うために、とても永い眠りに・・・

冬木市

ここでも願いをかなえる聖杯をめぐる戦いが開かれようとしていた。

衛宮士郎はランサーに再び命を狙われていた。家の土蔵に逃げ込んだとき魔方阵のようなものが輝きを放った。

そしてそこに美しい容姿を持った王・・・セイバーがあらわれた。

「っっ！・・・」

士郎はともかく、セイバーもとても驚いていた。

見覚えのあるとても懐かしい場所、そして愛した青年が目の前にいる。……だが

（この人は私が愛した人ではない。）

「あの〜。」

士郎が沈黙を破った。

「は、はい。なんでしょうか？」

「なぜ泣いているんですか？」

……！ 自分でも知らぬ間に泣いていた、だがいつまでもこうしていらなかった。

「いえ何でもありません。私はあなたのサーヴァント、セイバーです。」

「あ……ああ！俺は衛宮士郎だ。すきによんでくれていいよ。」

「そうですかそれではシロ……エミヤと呼ばせていただきます。私もそちらのほうが呼びやすいので。」

「ああそうか。」

（この人をシロウと呼んではあの人を裏切ることになる……）

こみ上げてくる思いを抑え、セイバーはランサーと戦闘する態勢に入った。

凜とアーチャーは急いで衛宮士郎のところへむかっていた。

（さてゲイボルグはどう戦うか・・・っ！）

ランサーとの戦闘を考えていたアーチャーはもう一人のサーヴァントがすでに戦っていることに気がついた。

そしてそこにたどり着くとかつて共に戦っていた女性が戦っていた。

ランサーは槍を構えセイバーに放った。  
ゲイボルグ

（くっ！まずいよけきれない！！！）

槍の一撃を覚悟したとき赤い影が私の前に現れ、その一撃を受け止めていた。

「無事か？・・・セイバー。」「！」

それはとても会いたかった人、共に戦い、愛していた人がいた。

「ア、アーチャー何を！」

凜はアーチャーがいきなり出て行ってしまいとても驚いていた。

「サーヴァントがサーヴァントを庇うだと・・・ちい！」

ランサーは自分が分が悪くなったことを理解しすばやく去っていった。

「いったか・・・。久しぶりだなセイバっ・・・！」

ガバッ！

「ほんとうに会いたかった。シロウにとっても会いたかった！あなたは本当にあのシロウなんですね？」

愛しの人が今ここにいる！また会うことができた！セイバーは涙をこらえ切れなかった。

「ちよつとまつっ・・・て？・・・ええ！」

「ちよつと二人なにしてるの！？」

遠坂とエミヤは今の状況にとっても混乱していた。

「セイバー今はこの場を納めることが必要だと思っただが・・・」

「はっ！・・・も、申し訳ない！」

耳まで真っ赤に顔を赤くし、セイバーは俯いた。そして凜が口を開いた。

「・・・で、あなたたちはどんな関係なの？」

凜がいまだ納得がいかないように聞いてきた。

「なあに昔の戦友だ。」

アーチャー（シロウ）はそういった。

「でもあなたたち時代は同じなの？」

こいつめ・・・あいかわず鋭い。

どうしていいのか、さっきからセイバーはおどおどしている。

「まあそれよりだ、その少年のことはいいのか凜？」

さっきから口をあけたまま呆けているエミヤを指していった。

「えっ！あ、ああそうね。とりあえず教会にでもいきましようか。」

そして四人はそろって教会へと向かった。セイバーとアーチャーは寄り添うように並んで・・・

教会につくとセイバーが言った。

「わたしはここで待っています。凜アーチャーもいいですか？」



「えっ！うん、まあいいわ、そこでイチャイチャでもしていればいいわ」

何かを察したように笑い凜はいった。

「「なっ！」」

凜の言葉に二人とも赤くなってしまった。

「じゃあいつてくるわ」

そういつてエミヤをつれていつてしまった。

「相変わらずアイツは油断ならないな。」

苦笑いしつつシロウがいった。隣にはまだ顔の赤いセイバーがいた。

「セイバーもう二人とも言ったぞ。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・はっ！すいません」

やっとセイバーが我に返った。

「なぜあなたがここに？」

「そういうおまえはどうしてだ？」

「わ、わたしはその、えと、・・・あなたに会いたかったから・・・」

尋常ではないくらい顔を赤くしましたセイバーは俯いてしまった。

「なっ！……なら俺と同じか……。」

えっ？今なんて？セイバーがシロウの顔を見た。シロウの顔もまた赤くなっていた。

そんなこの人がたまらなく愛しい。そうセイバーは感じ、シロウの胸に顔をうずめた。シロウはそれを拒まずセイバーを抱きしめた。ずっと一緒にいたい。時間がとまってしまえばいい。それがいまセイバーとアーチャーが思うことだった。

「そろそろいいかしら？それともおじゃま？」

いつのまにか凜とエミヤが戻っていた。セイバーとアーチャーは顔を真っ赤にし、セイバーは名残惜しそうにシロウから離れた。

「覚悟を決めたのですね、エミヤ。」

「ああ頼りないマスターだけどよろしく頼むよ。」

「はい、私はあなたの剣となり盾となりましょう。」

こうしてセイバーとエミヤが契約したところで再びアーチャーが口を開いた。

「ところでセイバーおまえは魔力を供給出来ているのか？」

「はい多くはありませんが魔力は頂けています。」

「むっ、なら良かった。」

二人が何の話をしているのかわからない凜とエミヤは混乱していたが、やがて凜が気になっていたことを聞いた。

「ねえ、二人は何を知ってるの？」

「・・・伝えても大丈夫だよな。」

「はい問題はないかと思います。シロウ。」

「「えっ!?!」」

「まあそういうことだ、俺は衛宮士郎、お前の行く末だ。・・・とはいっても可能性だな。」

「じゃあ何？あなたはここにいる士郎と同じなの!?!」

「まあ不本意ではあるがそうだ。」

「不本意って何だ「まあ嘘ではなさそうね。」・・・よ」

凜によってエミヤの言葉はさえぎられてしまった。

「そろそろいい？お兄ちゃん。」

急にとても強い気配を感じた。化け物といったほうがいいであろうサーヴァントと小さな少女がいた。

「せっかくマスターになれたけど二人にはここで死んでもらうね。」

バーサーカー。」

戦闘に入る寸前、アーチャーがさえぎった。

「なあひとつ条件でもいいか？俺とこのセーバーでそいつを一度殺せたら引いてもらってもいいか？バーサーカーにお嬢ちゃん。」

「あら知ってるの。まあいいんじゃない。」

バーサーカーも言葉にしてないが良いみたいだ。

「いくぞセーバー！」

「はいシロウ！」

## 新たな始まり（後書き）

読んでくださった方ありがとうございます。

短いし変だしこの次がいつになるかわかりませんがよろしく願います。

## 大きな壁（前書き）

感想くださった方ありがとうございます。 前回は本当に誤字が多かったので今回はきをつけたつもりです……。 もしも間違えがあったら教えてください。

相変わらず短いと思いますがよろしくおねがいします。

## 大きな壁

セイバーとシロウはこのバーサーカーのことを知っていてこうなることも覚悟していたので落ち着いて戦闘に望むことが出来た。二人とも過去に戦ったことがありバーサーカーの手も読めた。だがさすがはギリシャの英雄ヘラクレス一筋縄にはいかなかった。

シロウは「干将・莫耶」をセイバーは「インビシブル・エア風王結界」を駆使してバーサーカーの持つ巨大な岩の剣に対抗していた。バーサーカーにはランクA以下の攻撃は通用しない。シロウが惑わしセイバーが攻撃を与えるというやり方で二人は戦っていた。

（こいつはダメージを受けているのか！？）

攻撃を加えているセイバーは焦っていた、早く仕留めないと引き付け役のシロウに多くの負担がかかってしまう、その負担を少しでも軽くしたかった。

「セイバー！」

シロウの叫ぶ声が聞こえた、さっきまでシロウに気をとられていたバーサーカーが本命はセイバーだとわかり、いつきに距離をつめてきた。

（っ！）

気を抜いてしまっただけが何とか岩の剣を風王結界で受け止めた。  
・ ・ ・ が凄まじい一撃でセイバーの風王結界ははじかれてしまった。  
獲物をなくし防ぐ術がなくなったセイバーにバーサーカーはさらに

岩の剣を横薙ぎに振ってきた。

「くっ！」

セイバーは十数メートル離れたところまで吹き飛ばされたが衝撃が走っただけで、体に痛みはなく、目の前には赤い影があることに気づいた。

（！！！！！！）

それはシロウだったもろに腕にくらったのか物凄い量の血が流れていた。

「大丈夫か？セイバー。」

なおも自分を心配してくれる彼に胸が痛んだ。負担になるどころか自分を庇い、怪我まで負わせてしまった。

「・・・なぜ・・・それはこちらのセリフです！あなたの方が明らかに大変でしょう！」

「なあにこれしき、くっ」

シロウは強がっているが足元が完全にふらついている。

（私の剣は！？）

再びバーサーカーと向き合うために、さっきはじかれてしまった剣を取ろうと思ったが、それは無理だった。そんなセイバーの様子に気づいたのかシロウは投影を開始し、セイバーの剣「勝利すべき黄



金の剣<sup>カリバーン</sup>を作り出した。

「「「なっ!?!」」」

周囲の誰もが驚いていた。セイバーまでも驚きを隠せずにいた。

「おれはお前の剣を知っている問題ないだろう?」

意識も朦朧としている状態のはずなのにで投影まで行ってくれた。笑みを浮かべているがそんな余裕はないはずだ。本当に申し訳なくセイバーは感じた。

「あんな剣がなんだっていうの?バーサーカー!」

イリヤがバーサーカーに命令し、怪物はこちらに突進を開始した。

(もうどうこう言っている場合ではない!!)

セイバーは魔力を剣に込め、言い放った。

「約束された勝利の剣<sup>エクスカリバー</sup>!!!!!!」

セイバーの剣から究極の光の斬撃が放たれ、迫り来るバーサーカーを切り裂いた。

砂煙でどうなっているかわからないが次第に晴れてきて怪物が動かずにたっているのがかくにんできた。

「どうしたのバーサーカーやっちゃんささい!」

イリヤがそう命じるがバーサーカーは動かない、一回死んだのだ、誇り高い戦士は決して約束を破らなかった。

「という訳だ、じゃあなお嬢ちゃん。」

戦いが終わり四人は衛宮家へとすばやく撤退していった。

「まあいいわ、一度とはいえバーサーカーを死なせたんだもの、今回は許してあげる。」

イリヤもバーサーカーを連れ、城へと帰っていった。

「アーチャーか、面白いサーヴァントだったわ。ふふっ」

「はあっ、はあっ。」

「ちょっとアーチャー大丈夫!？」

「気にするな凜。」

正直もう倒れそうだった、だが心配かけまいと精神力でごまかしていた。

四人が衛宮家につき安堵の息をしたところで、気を抜いてしまったシロウに猛烈なめまいが起こった。

（くっ、ちい・・・ぐ！）

バタッ！

シロウは足の力が抜け床に倒れこんでしまった。

「くっ！？」

三人は何が起こったのか理解できなかった。しかし

「シロウッ！、シロウ！」

（だめだ、眠くなつてきやがった。くそつ。）

セイバーの叫びに近い言葉で二人は我に返った。シロウは返事をしない。そして我に返った遠坂は、

「ちょっとアーチャー！しっかりしなさい。アーチャー！」

遠坂はすぐに宝石を使った治療を始めた。セイバーは血が通っているのか疑うくらい青い顔をしてアーチャーの手を握り、震えていた。

「あの一撃をくらってすぐに宝具を投影して体の負担と魔力の消費がはんばじゃなかったんだわ。」

（いや！！だ、いやだ！！！！、いやだ！！！！！！！！！！）

やっと会えたのになぜ？、手に温かさが伝わってこない、セイバーは生きた心地がしなかった。

「大丈夫よセイバー、休めばもう元に戻るわ。奥に運びましょう。」

「わたしがやります！」

セイバーは叫んでいた。凜もさっきからおどおどしているエミヤも驚いていたが、やがて凜が、

「それじゃあ頼むわ、もしなんだったらそばにいてあげなさい。」

「ありがとうございます。」

セイバーはアーチャーを寝室まで運び、寝ているシロウの横に正座し見守っていた。

（わたしのせいだ、あそこで気を抜かなければ！）

涙がこぼれてきた、セイバーはシロウの胸に顔を押し付けしばらくの間そこで泣き続けた。

## 大きな壁（後書き）

読んでくれた方ありがとうございます。このペースで書いていけないと思いますが。

どうぞよろしくおねがいします。

へんな内容になってきているかも知れませんがよろしく願います。

衛宮士郎にも投影はおこなわせるつもりなので・・・

今回はこんな形で違和感あると思いますがおねがいします。

## 現在と過去（前書き）

いやあ、早くもペースが崩れてきましたね。

なかなかいい案が浮かばなくて、お気に入りにされている方々には本当に申し訳ないです。今後もがんばるのでよろしく願います。今回は戦闘も何もないです。展開が少なくつまらないと思います。すいません。

しかも短いし・・・

すいません徐々に長く出来るようにしていこうと思うのでおねがいします。

## 現在と過去

（ここはどこだ……。俺は確かバーサーカーに負わされた傷で・・もといた世界か？、いや違う）

シロウはとても懐かしいところで目を覚ました。それは自分が昔ずつと住んでいた家の一室、アーチャーはバーサーカーとの戦いの後から2、3日程眠っていた。だが本人はどれだけ眠っていたかを知らない。

（いかんどれだけ眠っていたのか、起きなければ、万が一敵が来たら・・・・・。だめだ体が重い。）

シロウは自分が起きれないのは、まだバーサーカーとの戦闘のときに追ったダメージのせいだと勘違いしていた。だが重いのは胸の部分だけだということに気づく。

自分の胸のほうに目をむけてみると美しい金色の髪と自分の胸にしがみついて眠るセイバーの姿が確認できた。

さっきまで起きていたのだろうか、とても疲れたように寝ている。

（どうしたものか・・・・・）

さいわい周りには、ほかにサーヴァントの気配はなかったので、このままゆっくりしていることにした。

明け方セイバーは目を覚ました。

（昨日もシロウにつきつきりていたのに途中で眠ってしまったんだ。シロウはどうだろう……。）

そう思つて顔を上げてみると、シロウはしっかりと目を開け、こちらの姿を見ていた。

「なっ、な、な、な、なななな」

「”な”だけじゃわからん」

やはりしっかりとおきてこちらにも反応をしてくれている。

「やっと目を覚ましていただけたんですね。」

（やっと？俺はそんなにこの状態だったのか。）

「セイバー、おれはいたい……。」

だがセイバーはいつのまにか涙を流し俺の胸に抱きついていた。



「いったいどれだけあなたは私を心配させたと思っているのですか、あの時、私が攻撃をくらっていたらあなたは傷つかずにすんだではありませんか。私のほうが防御のランクが高いのに、自然治癒の能力が高いのに、私が受けていたほうが良かったのに・・・なぜ・・・」

セイバーはシロウが着ていた服をとて強く握っていた。

（セイバーはずっと俺がかばったことを気にしていたのか。）

シロウはセイバーが思っていたことを理解し口を開いた。

「お前はおぼえていないか、セイバー？」

えっ、というように、顔をあげこちらを見る。

「俺は前にお前がバーサーカーと戦っていたときも最後かばいに入っただろう。たぶんそのときの気持ちと同じだったんだ。誰かが傷つくのを見たくない、誰かが傷つくなら俺が変わりになる。正義の味方をめざしていたからな。それにその相手がセイバーならなおさら傷つけたくなかったしな。」

セイバーは最初のバーサーカーの戦いのときを思い出していた。

自分がバーサーカーと戦い、ボロボロになり魔力の供給ももらえずにそれでもなお戦おうとしたとき、

バーサーカーが岩の剣を使い止めを放ってきた・・・それを当時、主だったシロウがかばい大きな怪我を負った。

あのときからシロウは何も変わっていない、またはあのときのシロ

ウに戻ってしまった。と考えた。

しかしセイバーはそんな優しさを持つシロウに惚れたのだ、いまみに他人を優先してしまう優しさを持ったシロウが。

「た・・・しかに・・・あのときも・・・そう・・・でしたが・・・私をかばうのはやめてくださいといったではありませんか！」

セイバーはどうしていいか分からなくなり、また泣き出してしまった。

「そうか・・・すまなかった。」

シロウは再び自分の胸で泣き出してしまったセイバーを優しくなで続けた。

セイバーがまた泣き疲れて眠ってしまった後、ゆっくりとふすまが開き、凜が入ってきた。

「どう調子は？」

どうやら凜にも心配をかけてしまったらしい。本当に申し訳ない。

「ああ大丈夫だ。もう戦闘にも支障はないと思う。・・・すまん心

配をかけたな。」

「そう、なら安心したわ、別にあんたがそんな謝る必要ないわよ。」

「おまえの宝石も治療に使ったのだろう？」

「ええ、だけど本当に気にすることはないわ、ストックはまだまだあるし。感謝するなら今そこで眠ってるセイバーに言いなさい、その子三日間ずっとあなたに付きっ切りだったわよ、あなたが家の前で急に倒れたときなんて顔を真っ青にして震えていたわ。」

「三日そんなに眠っていたのか・・・そうかそんなこともあったのだな。」

「まあいいわ、気にしないで、それよりも話し合いたいことがあるから、あとで居間に集まると思うからセイバーが起きたらでいいから来て。」

「話し合いたいこと？」

「ええ今後のことよ」

そうつって凜は立ち上がり、またふすまを閉めてエミヤいるほうへと向かっていった。

## 現在と過去（後書き）

読んでくださった方ありがとうございました。  
今回も誤字には気をつけたつもりです。

何か気になることがあったら教えてください。  
答えられるか分かりませんが・・・・・・。

次回もよろしく願います。

## 同盟      決意（前書き）

やっと更新できました。

今回も進度はあまり進んではいませんが。楽しんでもらえたらなあ  
と思います。

それでは4話です。

## 同盟 決意

いま俺とセイバー、凜と衛宮の四人で居間に集まり話し合いを行っている。

「ねえ衛宮君、私たち同盟を組まない？」

「えっ!？」

凜はバーサーカーとの戦いの後、とても考えていた。

バーサーカーはとても強力だ。普通は戦闘力が低い英霊が狂暴化することでそれを補っているのだが、

イリヤスフィールが連れているのは違う。ギリシャの英雄ヘラクレス。普通でも強力な力を持っているだろう英霊がバーサーカーとなり更に白兵戦が強くなっている。しかも一度倒しただけでは死なない。

アーチャーとセイバーが協力してもあの結果だった。

「衛宮君もこの前の戦いでイリヤって子が連れている英霊が強力すぎるってことぐらい分かったでしょ。アーチャーとセイバーが協力してあの結果だったのよ。何それとも協力したくないっての？」

凜がエミヤに問い詰めた。

「い、いや違う、突然で驚いたんだ。」

「あんた・・・はあ。そんなことで一々驚いてると早死にするわよ。それにこれは私たちの英霊のためでもあるのよ。」

「??????」

「なに不思議がつてるのよ。あんただってこの二人が敵同士になることなんてあると思う?あなたたちもお互いに戦いたくないんですよ。それに目的も同じようだし。ねえそうでしょ?」

シロウとセイバーは声には出さなかったが、この凜の意見にはとても賛成であった。そのため二人の表情には薄らと笑みが浮かんだ。

「ああ、そうだな。俺も遠坂が味方だと心強いし、アーチャーとセイバーが敵同士であってはいって欲しくないな。よろしく頼むよ。」

「それじゃあ決定ね。よろしく頼むわ。じゃあ放課後と帰宅後に情報交換をしましょう。あったらいいから分かったことを教えて頂戴。」

「わかった。」

「それでは私たちは屋上でほかの敵の英霊が来ないか監視しています。何かあったら意思疎通で教えてくれ凜。」

「わかったわ。それまでセイバーと愛でも育んでなさい。」

「「なっ!!!」」

凜の思わぬ発言にアーチャーもセイバーも真っ赤になってしまった。

凜の目は明らかに何かを楽しむような目をしている。  
そして二人同時に感じたのだ

（アカイアクマだ・・・）

と。

そして次の日。

学校が終わり、四人は屋上に集まっていた。

「アーチャーこの結界誰がはったか分かる？」



「おそらくだがそれはライダーによるものだろう。この様子だと発動まで後五日つてとこか。これが発動するとうるくなことが起きないだろう。」

「おい遠坂何の話をしているんだ？」

昔の俺め・・・ずっとぼけたことを・・・

「ねえ衛宮君、あなたもしかしてこの学校に張られている結界に気づいてない？」

「結界？あの門に入っただきの甘ったるい感じのやつか？」

「・・・あんたそれを不思議に思わなかったわけ？」

「いやただの立ちくらみか何かだと思って。」

「「「「「「「「「「「「」」」」」」」」」」」」」

アカイアクマと未来の俺一（可能性のひとつだが）とセイバーがジト目でこちらを見ている。・・・。。。なんださ。

「まあわかったならいい。どうする凜結界の核を潰していくか？」

「そうね、そうすれば発動を遅らせられるかもしれないし。でも位置の把握が出来ないわ。」

「それならエミヤを使えばいいと思います。エミヤはそういうことに関しては敏感ですから。」

「えっ？」

本人の衛宮君も驚いているじゃない・・・本当なの？

「セイバーそれはなぜ分かるの？」

「昔の体験からですよ。」

セイバーはそう言い。アーチャーを見た。彼は懐かしむような表情をし、笑っている。

「なるほど。」

「それじゃあ、行きましょ。衛宮君。」

「お、おう」

そうして二人は校舎の中に入ってしまった。

「これからずっとあの俺を凜が支えてくれ、導いてくれれば、あの俺はこうならないと思うのだがな」

シロウがぼそりとはく、すこし悲しげな表情をしていた。

「いいえ」

そつとセイバーが両手でシロウの手を覆った。

「いまからでも遅くはありません。今回の聖杯は異常なようです

し、それにいまのあなたには私がついています。私を変えてくれたあなたのように私はあなたと良い道を進めるように導きます。ですからそんなに悲しい顔を見せないでください。」

このセイバーの言葉は今のシロウにとってこれ以上ない慰めだった。そしてシロウは誓った。セイバーと共に戦い、自分の間違った道を正すことを……。

## 同盟      決意（後書き）

読んでくださった方ありがとうございました。

だんだん話を考えるのが難しくなってきました。

出来る限りがんばろうと思います。……。

何かアドバイスやリクエストがあったらどうぞ！  
答えられるかわかりませんが……

次回もよろしく願います。

## 学校の結界（前書き）

やっと更新できました。

相変わらずの駄文ですがどうぞよろしくお願いします。

## 学校の結界

現在士郎と凜で結界の核を潰している。この二人にはライダーのマスターが慎司であることは伝えた。

「ふう、こんなもんかしら。あのゴミ、私がいると知っていて喧嘩売ってるのね。」

「本当に慎司が・・・ああこれくらいでいいだろう。」

二人はもう潰しきってしまったのだろうと思っているがシロウは違った。見落としている場所がある。

「まだだ」

「「え？」」

「貴様は普通は一番疑っても言い場所だぞ。そんなところも見当がつかないのか。」

「そんなこといわれてもあれだけ潰したんだ。大丈夫だろう？」

「はあ・・・まあいいお前はあいつが魔法陣を書くとしたらまずどこに書くと思うんだ。一番かけそうな場所はどこだ。」

「えっ？うーーーーん・・・あっ！そうか弓道場まだ見てない。」

「そこにほんとにあるの？」

「凜君は未来から来た私を信じないのかね。」

「べ、別に疑ってなんかないわよ！ほら早く行くわよ。」

「弓道場」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

士郎と凜は前にある陣を見て啞然としていた、ここにあるものは見えなくなっているわけでもなく、とても強力なものであると分かる。

「こんなのを見落としていたのね。」

「ああ良かった。」

二人は早速それを潰しにかかった。そのとき

「きゃあああああ！」

女性の悲鳴が上がった、

「今のは！おい遠坂！」

「分かってるわよ、……よし、終わったわ。」

四人は急いで悲鳴が上がった場所に向かった。

「ライダーでしょうか」

セイバーがシロウに聞く。

「ああおそろくな、凜、君の出番になるぞ。治療でな」

「ええそうみたいね。生気がないわ」

「気を失ってるだけじゃないのか？」

「違うんだよ、馬鹿」

「ああ気が散るそのドア閉めて！」

「あっああ」

（まてよライダーはここからいなくなったのか？）

そう思った瞬間銀色に光るものが遠坂の頭に向けられ飛んできた。

「遠坂危ない！」

ガキンッ！



すばやく反応したシロウが干将・莫耶で叩き落した。

「むやみに人をかばうな馬鹿。だからおまえは足を引っ張るんだ。」

「なんでだよ普通助けるだろう。」

「エミヤ、私もシロウと同じ考えです。あなたがもし死ねば私は消えてしまうのですよ。」

「貴様のせいでセイバーが消えるんだ全部を守るといつて貴様が死んでもセイバーにまで被害が出る、それに今貴様が抱いている正義の味方はあきらめたほうがいい。その先には後悔と死しか残らん。」

「なっ！」

「凜、俺たちは馬鹿なマスターの英霊を相手してくる」

「ええそうして」

「「くれぐれも貴様（エミヤ）は来るな（来ないでください）」」  
「」

ふたりがぴったりとハモリ、物凄い量の殺気を送られエミヤは動くことが出来なかった。

「さているんだろう出てきたらどうなんだライダー？」

「そうです隠れていないで出てきなさい。」

「なんだなんだ衛宮が来ると思ったら英霊が来たか」

慎司が木の影から余裕の笑みを浮かべてでてきた。

「なんだ最弱のマスターとその英霊か」

シロウが挑発をする。

「な、なんだと！僕があゝの衛宮より遅れているというのか。」

「そうだともそもそも君には魔力がない。魔術なんて使えないのだから？。」

「ふざけるな！僕は間桐の後継者だぞ！くそつやれライダー！」

自分が不利だともわかっていない慎司の火蓋が切られたことでライダーとの戦いが始まった……

## 学校の結界（後書き）

読んでくださった方ありがとうございました。  
なるべく早く仕上げるように善処するのでまたよろしく願います。

## V Sライダー（前書き）

久々の投稿です。

相変わらずの駄文そして短文ですがよろしく願います。

## V S ライダー

「はぁ！」

「くっ」

現在セイバー・アーチャーVSライダーとなっているが明らかにライダーが劣勢だった。

「こんなマスターだと本来の力も出せなかつた。哀れだな。」

「おい！ライダー何やってるんだ！早く二人とも殺しちまえよ！」

だがシロウとセイバーに勝てるはずもなく、ライダーは防戦一方だった。

「セイバー、ライダーの相手を頼む。」

「わかりました。」

アーチャーはそういつと慎司のほうに向け、駆け出した。

「ひいつ、ライダーこいつを何とかしろ！僕を助ける！」

慎司は恐怖でそう叫んだが、ライダーはセイバーが身動きが取れないようにつかれているためどうすることもできなかった。そしてアーチャーは慎司の前まで行くと、こぶしを握り思い切り殴りつけた。

「がぁ！」

当然、英霊に殴られた慎司は吹っ飛び、木に叩きつけられた。そしてシロウは慎司の持っていた「偽臣の書」を取った。

「なっ！ かつかせ！」

「ライダーに命ずる、今すぐ真の主の元に戻れ、そしてその主が二度とこのような兄に近づかれないように守ってやれ。この書は私が処分しよう。」

「……わかりました。」

「ライダー何やってるんだ！ おい！」

ライダーはシロウに言われたとおりに従い去っていった。そして必要のなくなった偽臣の書は音を立てて燃えた。

「あああつ！」

慎司が叫びをあげている。セイバーがこちらに来て、シロウの隣に並んだ。

「死にたくなかったら誓え、もうこの戦争には関わらないと、誓わないのならこの場で殺す！」

「凜や衛宮にも今後危害を加えないと約束してください。」

殺気をだしてシロウとセイバーは慎司を脅した。

「ひい！ つわっわ、わかった」

「なら、さつさと消える。」

そついうと慎司はあわてて踵を返し逃げていった。

「ふうさて凜たちのところに戻るかセイバー？」

「ええそうしましょう。」

二人はなぜか寄り添うようにして歩きながらマスターのいるところへと戻っていった。

「凜どうだそのこの調子は？」

「ええもつ心配ないわ、それであんたたちの事を聞かせてもらおうかしら。」

「わかった。」

「わかりました。」

そしてシロウとセイバーは自分たちがライダーと戦ったこと、慎司を殴ったこと、ライダーを元の主のそこへ戻したこと、慎司を脅したこと、すべてを話した。

「だからもうこの結界についても心配はいらんだろう。」

「そう良かった。」

衛宮が満足したような笑みを浮かべている。

「フフッ」

セイバーがその様子とシロウを見て笑う。

「どうしたセイバー？」

シロウがセイバーにたずねたが、セイバーはなんでもないというように手を振り言った。

「シロウの優しさが変わってないことが分かってうれしいのです」

「はいはいそこまで、じゃあ今日の結果をまとめるために衛宮君の家に行きましょう」

「「ああ」」

「はい」



## V Sライダー（後書き）

読んでくださった方ありがとうございました。

次はいつになるか分かりませんがよろしく願います。

衛宮家にて（前書き）

めっちゃ短いです。

## 衛宮家にて

次はキャスターか、キャスターはただあいつと過ごしていたいだけなんだろうがな。

「セイバー君は今後どうしようと考えている？」

「士郎と一緒に居ます。」

速攻で返事が返ってきた。

「そ、そうか。」

俺はしばらく考えた。

「士郎、何を考えているんですか？」

「ああキャスターについてだ。あとイリヤについて。」

「そうですね、キャスターに関しては衛宮を見張っておけば問題ないのでは？」

「まあそうだろうな、あの馬鹿が操られていくのを防げば良いかもしれないが、・・・」

「キャスターが動きを見せるかもしれないと・・・」

「そうだ。」

キャスターはやろうと思えば手を組めるだろう、

「凜に相談してみるか。」

「そうですね。」

「凜、君は今後どう動くかと思っている。」

「そうね、ライダーの心配はもういいのよね。なら次はキャスターかしら。」

「そうか動くならば、早いほうがいいと思うぞ。」

「そう。わかったわ、今夜動いて見ましょう。」

「了解だ。」

衛宮が起きて一人で寺に向かおうとしている。

「何をしているんだ小僧？」

少し殺気をいれて声を発した。

「はっ！ア、アーチャー、おれはなぜ。」

「キャスターに操られていたんだ馬鹿者。」

「そうか」

「衛宮、あなたはもつと警戒して動いてください。それと士郎から教えてもらった鍛錬はしっかりとやっていますか？」

「ああセイバーやってるよ」

「はいはい、そこまで。じゃあ行くわよ」

そうして4人はアサシンとキャスターが居る寺へと向かった。

衛宮家にて（後書き）

短くてすいません。

ネタが浮かびません。

アドバイスください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0223o/>

---

Fate ~ 再開 ~

2010年11月27日15時21分発行